

うたごえ新聞



「紙芝居がテキ屋みたいと思われたが、子どもの成長を願ってやっている」(写真提供・カエルの会)

わたしの紙芝居

なぜ街の魚屋さんが?

「さあ、ウサギの母さん、の始まりだよー絵の見えない子は、あたしを見てな！」
紙芝居が始まると、保育園の子どもたちは、子どもになったり、時には色っぽい目つきのお姉さんになったり、ダラシのないおじさんになったりする紙芝居屋さんに、一時間も魅入られています。今では路上から姿を消して

しまった紙芝居を子どもたちに見せたいと、初老といわれる年でもなお、自分の藝を磨き、子どもたちに届けたいと手井当で保育園や幼稚園まわりをしている魚屋さんがいます。

うたごえ運動にとっても大切な、創造と普及の姿勢とその心を、ある日、訪ねて聞かせてみました。

踊りは芸者さんに

滝口さんが紙芝居屋だったのは、一九五一年〜五年の五年間でした。
三万巻の紙芝居を演じた、といえます。有名な「黄金バット」はもちろんです。当時の住井する原作「橋のない川」が「橋は誰のものか」という紙

だと思っていたら、結構「とひょうきんに語る滝口さん」ですが、子どもたちのことになると顔が紅潮し、芸の話になると、座ったまま日本舞踊が始まり、しゃべり口は落語家そっくり。

てあげるんでもない。絵芝居をさせるんですよ。カミのシナイんだから」と芸の面白さを語る滝口さんは、紙芝居が「道楽」となった今でも「年をとると、体力にまかせた声の出し方じゃやっていけない」と、新聞で知った音楽センターのダイヤルを回したのです。

「子どもたちはね、先生やおじさんには話したんです。『A君とB子ちゃんがお医者さんゴッコをやってるよ』なんてことは、あたしの友だちの校長先生は、いっぺんも耳うちされたことがないって」

子どもの鑑識眼

親戚から総スカンをくらったほど、テキ屋や大道芸人と同じに見られていたという紙芝居屋の滝口さんが、

「バットで親をなぐるなんて……」

滝口

忠

さん (東京・調布市)

歌も習って2年

ここ2年間、毎月、音楽センターに通って、奈良恒子さん(中央合唱団二期生)の声乐レッスンを受けている滝口忠さん(50歳)は、東京・調布市のお魚屋さん。この魚屋さんの車の中に、いつも積んであるのが、からくさ模様の風呂敷に包んだ紙芝居セットです。東京に魚屋修業に出る前は、千葉県船橋市で紙芝居屋だった滝口さんは、今でも週に一回、都内の保育園、幼稚園をまわって、子どもたちと紙芝居を楽しんでいます。

紙芝居にもなると、子どもたちに紹介されたこともあった、とか。かつては市川右太衛門主演で映画にもなった「旗本退屈男」の、独特な笑い方ができるまでに2年かかったなど、子どもたちに、より高みの妻を、と上野まで、毎月三百円の入場料を払って落語を研究に行きました。サラリーマンの月給が三千円の時代でした。二年間ほとんど毎日、元は吉原の妻着さんに、踊りの稽古をつけてもらっていたこともあります。

紙芝居にうちごむのは、単に好きだからではありません。金属バットで親を殺してしまつた青年や、子どもの自殺といった最近に触れ、「紙芝居のおじさんの拍子木や大鼓の音が聞こえれば子どもは、自殺しよう」と思ったこともあった。

居縁業。子どもたちがお客さん気分になって、アメをなめなめ楽しんでくれないければ食べないおじさんたちは、けっして馬鹿にできない子ども達の鑑識眼を思いやり、「お客さん」に喜んでもらえる藝を開拓していったのです。

「カエルの会」への問い合わせは☎〇三六〇五九九八一まで。

「あたしの紙芝居は、競輪や競馬みたいな、魚屋の道楽です。」

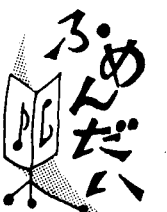
「紙芝居は、競輪や競馬みたいな、魚屋の道楽です。絵を語る」



▲滝口さんはいい芝居のためにと歌も習い始めました。

第53号

創作特集号



正月休み、熱海のホテルで大浴場にはいついたら湯気の向うから声をかけられた。

「新年会に来ていた東京のうたごえ活動家。風呂の中の驚き。」

☆ ★ ☆
昨春、放つておいたスイセンの球根から芽が出ていた。ペランダの植木鉢から半分も根をさらして、水もやらず、陽も当たらず、日常、見落としてがちな生命力の強さに驚く。

☆ ★ ☆
モチがどのにつかえて死ぬ老人もいるが、今やニュース性は少ない。

タンがつかまって少し血圧が高くなったら、救急車ばかりでなく保守政界人が飛んで来た。

☆ ★ ☆
罪人なのに罪人扱いされない、この国の政治の驚き

もうすでに
世を見つけた
寒梅の (未)